



鴻巣に伝わる郷土芸能

# 原馬室の獅子舞・棒術

## はじめに

鴻巣市の原馬室地区には、獅子舞と棒術が伝えられています。この獅子舞は1人立ち3頭獅子と呼ばれる形式のもので、1人が一つの獅子頭をかぶり、3頭で舞うものです。この形式の獅子舞は、東北地方から関東地方を中心に分布し、なかでも埼玉県は伝承地が多く200ヶ所以上あり、「獅子舞王国」と言われるほどです。

このように多数ある本県の獅子舞は、詳細に見るとそれぞれ地域的特性をもっており、「埼玉県民俗芸能誌」によれば大きく7系統に分けられています。この分類では、原馬室の獅子舞は中央部系統に属していますが、その特色とするところは、曲、舞とも一曲形式で、種々の舞の要素が一曲の中に盛り込まれ、長時間にわたる構成となっていることです。

この獅子舞は、昭和34年9月に鴻巣市指定無形文化財、昭和37年3月には本県を代表する獅子舞の一つとして県指定無形文化財の指定を受けています。さらに文化財保護法の改正によって昭和54年3月、県指定無形民俗文化財に再指定されています。



## 獅子舞棒術の由来

獅子舞の由来については、現在保存会に長さ15メートルに及ぶ長大な巻物『獅子舞略縁起』が残されています。原本は代々名主を務めた原丈右衛門宅にあったようですが、後に村長を務めた藤井家に伝来したといわれています。その主な内容によれば、日本の獅子舞の起源は、獣のなかで最も賢者の狐が中国に渡り五穀の実を持ち帰ろうとしたとき、その番をしていたのが獅子で、狐は知恵くらべて獅子を死なせてしまった。日本に帰ってきた狐を祀ったのが稲荷大明神で、稲荷は獅子を平らうため獅子の頭を作って祀り、笛太鼓の鳴り物で舞うようになったということです。

そして、巻末に「天正二申庚戌五月吉日、山田右京助、橋本市左衛門、馬室郷藤井孫右衛門殿」とあります。村の俗承によると、山田右京助、橋本市左衛門の2人は田楽師で、天正二年(1574)にこの村を訪れ、舞を伝授してくれたのだといわれています。なお、天正十年(1582)の銘の入った獅子頭がかって存在したとのことですが、確認できないのが惜しまれます。

一方、棒術については名主金子源右衛門宅に「棒の始之事解」、「棒の解」という古文書が伝えられていたとのこと。それによるとこの棒術は宮本武蔵の二刀流、佐々木庵流の龍窩流、柳生十兵衛の神陰流の三法をかたどったもののだといわれていますが、この古文書は現存しておらず詳細は不明です。





## 名称と組織

この獅子舞は、地元では「シシマイ」あるいは「シシ」と呼ばれていますが、花笠の持つ竹の楽器名跡<sup>シシ</sup>に由来する「ササラ」とも広く呼ばれています。また、獅子舞を舞う人たち（獅子役者）を獅子方（シシカタ）、笛を吹く人たち（笛役者）を笛方（フエカタ）と呼んでいます。

棒術は、3尺（約93cm）の木太刀と6尺（約180cm）の櫓棒、真剣の太刀を用いて組み合わせをつくり33の型を演じています。また、棒術を行う人たち（棒役者）を棒方（ボウカタ）と呼んでいます。

## 祈禱・祭典

原馬室の獅子舞は、7月の祈禱と8月の祭典があります。7月に行われる祈禱ささらは、村内の悪疫退散、家内安全の祈禱を目的としているのに対して、8月の祭典は五穀豊穡、天下泰平を願って奉納されています。

7月の祈禱は、獅子のもつ強い力を借りて悪疫を退散させようとする、呪術的要素がはっきり出ています。古くは原馬室内の家々を一軒毎に訪れて祈禱を実施していましたが、近年戸数が急増したためそれが不可能となり、現在では愛宕神社から納神宮までの17ヶ所（表1参照）で奉納しています。この祈禱ささらでは獅子舞だけで棒術は行われません。

祭典は8月17・18の両日、観音堂、愛宕神社、野宮神社、氷川神社、雷電社の4社1堂を舞庭として行われてきましたが、昭和46年以降は8月18日の1日（現在は18日前後の休日）だけに観音堂と4社のうちのいずれか1社（4年で一巡する）を舞庭として行われています。また、この祭典では、獅子舞と棒術が同時に行われます。

## 獅子舞の演技

獅子舞は、7月の祈禱と8月の祭典で舞われていますが、祈禱と祭典では曲目と舞の構成に大きな相違があります。さらに同じ祭典の獅子舞であっても、観音堂と愛宕神社において奉納されるものと他の三社（野宮神社、氷川神社、雷電社）で奉納されるものではその内容を異にしています。また、原馬室の獅子舞では笛の曲目と舞はそれぞれ別の名称をもっています（表2参照）。

ちなみに原馬室で現在も伝承されている笛の曲目は全部で17曲です。

表1 祈禱獅子舞実施場所・予定時刻

順序	場 所	時 刻
1	愛 宕 神 社	9時00分
2	雷 電 社	9時30分
3	観 音 堂	10時00分
4	南 中 学 校	10時30分
5	神 明 社	11時00分
6	谷 津 不 動 尊	11時30分
7	馬 室 小 学 校	12時00分
8	白 雲 荘	12時30分
9	第二あしたば作業所	14時00分
10	氷 川 神 社	14時30分
11	野 宮 神 社	15時00分
12	谷 津 第 二	15時30分
13	大 栄 団 地	16時00分
14	あ た ご 公 民 館	16時30分
15	松 原 小 学 校	17時00分
16	小 松 原 神 社	17時30分
17	納 神 宮	18時00分



図1 祈禱獅子舞実施場所及び順序



## 祭典における曲目と舞 (観音堂と聖岩神社における祭典・表2)

### 1. すりこみ行列 (写真4)

獅子舞一行はすりこみ六曲の笛(Ⅰ-①~⑥)にのり舞庭に参入します。

### 2. 四方固め (写真5)

笛は(Ⅱ・四方固め)の曲となり、3頭の獅子が舞庭の中に並んだ一行の周回を巡るよう「四方固め」2の舞を舞います。獅子は拝殿正面の位置に着座し、舞庭では棒術の演技が繰りひろげられます。ここで獅子役者の演技は一旦休止となり、棒術の演技が行われます。〔棒術35演目の実施〕

### 3. 野辺の道行

棒方最後の演技が終了となる時に(Ⅲ・野廻り)の笛が吹かれ、獅子舞が再開となります。「野辺の道行」3の舞です。着座している獅子の中から野廻りの曲にのり法眼が腰を落としたままの姿勢で前に進み出ます。そのまま前後にゆきつもとどりの動作を繰り返しながら徐々に中腰となり中央に至りはじめて直立します。他の2頭の獅子もここで立ち上がります。

### 4. 岨の篠入り (写真6)

笛は(Ⅳ・篠がかり)の曲となり、舞庭中央にさされた笛を中心にして法眼、後獅子、女獅子が舞い、最後に法眼と後獅子が笛をはさんで向かい合い、法眼が笛を引き抜き口に加えることによって笛がかりは終了となります。

### 5. 深山のまどい・6. 笹の響

笛は(Ⅴ・おとしあい)の曲となり、法眼が笛を加えたまま「深山のまどい」5の舞に移ります。3頭の獅子は舞庭に手をつけて大きく廻りながら次第に舞庭中央に寄り、拝殿に正対し横一線に並びます。ここで(Ⅵ・うた笛)となります。

### 7. 唱歌

獅子の背後に謡役が立ち「唱歌」となります。謡役は扇を広げ一番唄、二番唄を順次歌います。唱歌の最中、獅子は太鼓の胴部分を叩き左右にステップを踏み、唄に聞き入る態を演じます。二番唄に入ると獅子は拝殿に対して縦一線に並び変わります。

### 8. 奥の谷越

笛は(Ⅶ・谷越え)の曲となり、獅子は縦一線のまま左右に移動する動作を繰り返します。そして3頭は互いに顔を見合わせるように中央に集まり腰を落とします。



写真1 折橋ささら(神明社)



写真2 折橋のカゼを受ける



写真3 折橋ささら(馬室小学校)



写真4 祭典・すりこみ行列





写真5 祭典・四方固め



写真6 祭典・組の繰入り



写真7 祭典・女獅子かくし



写真8 祭典・花の夢路

## 9. 弥生の遊山

舞庭四方を飾る花笠がここでやや中央に寄ります。笛は(X・花がかり)の曲となり、「弥生の遊山」9の舞へと移ります。この舞は3頭の獅子が四方の花笠を順次巡って歩くというもので、俗に「花見の舞」と呼ばれています。

## 10. 女獅子かくし(写真7)

しばらくして法眼は女獅子を独占することを思いつきます。法眼は舞庭中央の花笠の中に女獅子をかくします。笛は(X・かくし笛)の曲となり、「女獅子かくし」10の舞に移行します。後獅子は女獅子がかくされたことに気づかず1人で舞い続けますが、やがて女獅子のいないことに気づき探し始めます。法眼も協力するふりをしてともに探す舞をしますが、時おり後獅子の目を盗んでは女獅子のそばに近づき2頭でたわむれます。やがて後獅子は女獅子を見つけ出すことに成功しますが、それが法眼の策略であったことを悟ります。

だまされたことに怒った後獅子は法眼と激しく争いをくりひろげます。曲、舞ともテンポの早い勇壮なもので、本獅子舞のクライマックスともいえる場面です。若い後獅子は法眼を圧倒し一度は女獅子を獲得することに成功します。ここで花笠は拝殿に対して横一線に並びその後ろで後獅子と女獅子が仲良く舞い遊びます。

## 11. 花の夢路(写真8)

智慧にまさる法眼は再び一計を案じ、後獅子を誘い出し眠らせることに成功します。後獅子が眠っている間、今度は法眼と女獅子とが仲良く舞います。笛は(XI・XIIの神楽笛)でメロディーは同一ですが、トーンが異なって演奏されます。

## 12. 岩戸の曙

眠りからさめた後獅子は二度までも法眼の策略にかかったことに大いに怒り、再び両者の間で争いの舞がくりひろげられます。「岩戸の曙」12の舞です。

## 13. 御世の恵み

やがて争いは治まり笛が(XI・天地蓬萊)の曲となり「御世の恵み」13の舞となります。3頭の獅子は花笠の背後に横一線に並びます。そして花笠が左右に分かれその間を3頭の獅子が前に進み出て、拝殿へ向かって三度拝礼し舞いは終了となります。

この後、神社の舞庭より帰る時の笛は(XV・街道下り)ですりこみの時の曲と異なり、(追分の笛)ともいわれますが、観音堂では(天地蓬萊)で舞は終了となり、その後手打ちとなります。



表2 舞と笛の対応表(観音堂・愛宕神社)

舞の名称	笛曲の名称	(通称)	備考
1. すりこみ行列	I. ① 鶴の声 ② 遠 鶴 ③ 鳳鳥の声 ④ 二慈鳥が羽合 ⑤ 鶯返し ⑥ 街道下り	(つるのこえ) (とおささぎ) (どじょうねこ) (にしじがは) (とんびがえし) (かいどうくだり)	すりこみ6曲の構成は、各神社とも同じ
2. 四方固め	II. 四方固め	(しほうがため)	
3. 野辺の道行	III. 野廻り	(のまわり)	謡歌による唱歌
4. 組の篠入り	IV. 篠がかり	(ささがかり)	
5. 深山のまどい	V. おとし合い	(おとしあい)	
6. 笛の響	VI. うた笛	(うたぶえ)	
7. 唱歌			
8. 奥の谷越	VII. 谷越え	(たにごえ)	
9. 弥生の遊山	IX. 花がかり	(はながかり)	
10. 女獅子かくし	X. かくし笛	(かくしぶえ)	
11. 花の夢路	XI. 神楽笛	(かぐらぶえ)	
12. 岩戸の曙	XII. 神楽笛	(かぐらぶえ)	
13. 御世の恵み	XIII. 天地蓬萊	(てんちほうらい)	
	XIV. 街道下り(追分)	(かいどうくだり)	

### コラム1 1人立ち獅子舞と2人立ち獅子舞

日本の獅子舞は、風流系の「1人立ち獅子舞」と神楽系の「2人立ち獅子舞」に大きく分けられ、信州から箱根の関へ南北に引かれる線を境に、前者は東日本に、後者は西日本にかなり明白に分かれて分布しています。

### コラム2 1人立ち獅子舞の系統

埼玉県の獅子舞は、その多くが3人1組で舞う「1人立ち3頭獅子舞」であり、倉林正次氏により曲目数・舞のたて等から中央部・北部・西部・山麓部・北西部・東部・東南部の7つの系統に分類整理されています。

## 棒術の演技

棒の演目は表3に示したように、「四方固め」をはじめ35演目あります。「四方固め」は親方によって演じられ、真剣を手にして「浄め」や「祓い」を舞庭で行います。

次に小さな子が登場し、一箇①から七箇④まで簡単な演技が続けられます。その直後、はじめて六尺棒が登場します。「棒車」⑤です。「棒車」は難しい演技で子どもの素朴な演技を見ていた人々は、その迫力に驚かされます。「棒車」終了後、しばらく比較的やさしい演目(⑥～⑨)が続きます。そして、「闇心棒合上段」⑩が登場してきます。この演目はいくつかのストーリー性のある演目のうち最初に登場するものです。暗闇の中で太刀を探し求める演技は観客を沸かせます。



写真9 見ごたえのある「棒車」



写真10 迫力ある「不見引込棒四人」



やがて「不見引込棒」⑭という六尺棒を持つ4人による迫力ある演技が演じられます。再び、演技力を要求される「心太刀胸捕」⑮からはじめて太刀を佩く者が登場します。

太刀を佩く者が登場するのはこの他に「足懸」⑯・「捻捕」⑰・「心太刀襟取」⑱があります。これらの演目は立廻りをした挙句、太刀を振り落とされて止むを得ず刀を抜くという形式をとっています。

演劇性の強い演目は「捻捕」⑰でピークを迎えます。特に六尺棒で太刀を打ち落とされた者が逃げまわるユーモラスな場面は大いに演技力が要求されます。「捻捕」が終わると後見人が登場して格調高く演技を見せます。そして親方が来年の親方を披露する「小心太刀」⑳へと続きます。「抜附」㉑から真剣が使用され、緊張の中で「虎走り」㉒が親方によって演じられ、棒術は終了となります。

大筋で演目の配列を追いかけてみると、「儀礼」→「型を紹介する演目」→「ストーリー性のある演目」→「真剣による緊張の演目」といった図式が浮かんできます。

表3 棒術の演目一覧表

	名 称	人数	真剣	太刀	六尺棒	備考	難易度
	四方固め	1	1			●	
①	一筋(一打)	2		2			a
②	三筋(三打)	2		2			a
③	五筋(五打)	2		2			a
④	七筋(七打)	2		2			a
⑤	棒 単	2		1	1		d
⑥	刀 斬	2		2			b
⑦	花切抜(端切抜)	2		2			b
⑧	巻青眼四人	4		4			b
⑨	青 眼	2		2			b
⑩	蘭心(真)棒合上段	2		2			d
⑪	編 単	2		2			c
⑫	小手捕二つ飛び	2		1	1		d
⑬	巻 青 眼	2		2			c
⑭	木見引込棒四人	4			4		e
⑮	跨 弁 し	2		2			c
⑯	兜 割 撞 目	2		1	1		e
⑰	蘭心(真)太刀	2		2			e
⑱	心(真)太刀胸捕	2	(1)	2			f
⑲	兜 割 差 的	2		1	1		e
⑳	小 手 捕	2		1	1		f
㉑	足 懸	2	(1)	1	1		f
㉒	兜 割	2		1	1		f
㉓	捻 捕	2	(1)	1	1		f
㉔	木見引込棒	2			2	○	f
㉕	心(真)棒撞退	2		1	1		g
㉖	心(真)太刀	2		2			g
㉗	整 棒	2			2	○	g
㉘	心(真)太刀襟取	2	(1)	2		●	g
㉙	木見引込棒・整棒	2			2	○	g
㉚	小心(真)太刀	2		2		○●	g
㉛	抜 附	1	1				g
㉜	抜 附 仕 合	2	2				g
㉝	虎 走 仕 合	2	2				g
㉞	虎 走 り	1	1			●	g

●は親方の演目 ○は後見人の演目 真剣の( )は真刀のみ

### コラム3 棒術の難易度

棒術は、演技の難易度から7つのグループに分けられるようです。それを色分けしていますが、aグループ、bグループ、cグループが初心者で比較的若い者が演技します。dグループ及びeグループは中堅、f・gグループは上級者の演目といえます。

### 棒術の見どころ

#### 厳粛な「四方固め」

棒術の一番最初に行われるもので、真剣をもって正面(拜殿)に向かい、ヤットト一の気合とともに切先を左右に突き出し、次いで後ろに向きをかえ同じように左右を切ります。刀の威力によって「舞庭」を払い清めることから、「四方固め」は「浄めの棒」と理解されています。

#### 邪念を払う「一筋」

子どもの手によって行われます。2人の子どもが向き合って太刀を打ち合わせるという至極簡単なものですが、大人の介添を受けながら行う姿は本当にほほえましい風景です。この太刀の打ち合わせには、本来、物と物を打ち合わせて悪霊を払うという考えがあったものと思われます。そして、それを純真無垢な子どもが行えば、なおさら悪霊払いの効果があるといえるでしょう。



### 見ごたえのある「棒車」(写真9)

1人が木太刀、もう一方は六尺棒をもって立回りを演じます。六尺棒はこの「棒車」から登場します。2人が2回飛びあって打ち、最後に肩に背負った木太刀を六尺棒で打って終了します。途中、激しく打ち合う動的な場面などは、見る者の気分をぐいぐいと演技に引き込みます。「棒車」は前述の「四方固め」や「一箇」などと違って、だいぶ複雑な動きを伴ったものになっています。

### ユーモラスな「捻捕」(写真11)

演劇的で、見ていて滑稽なものが「捻捕」です。1人が自分の太刀を払い落とされて、あわてて逃げ回ります。逃げているうちに夢中で相手の六尺棒にしがみつきます。すると、相手はずみで棒を離してしまい、六尺棒が思わず手に入り立場が全く逆転します。見ている者には大変面白いものですが、演ずる2人は追いつ追われつの汗だくの奮闘です。

### 見事な「虎走り」(写真13)

その年の親方が棒術演技の最後にしめくりとして演じます。この演技は真剣を空中高く投げ上げ落ちてくるところを右手でしっかり受け止めるもので、大変難しく、剣を投げ上げる時観客は息を殺して見守ります。この場面はスリルと気迫に満ちた見事なもので、棒のハイライトです。



写真11 ユーモラスな「捻捕」



写真13 親方による「虎走り」



写真12 真剣による「抜附仕合」



写真14 笛方と獅子(すりこみ)



写真15 型の決まった「虎走仕合」





## 原馬室獅子舞棒術保存会

原馬室の獅子舞棒術保存会は、郷土馬室の地に伝わる貴重な文化遺産を後世まで伝えることを目的として、地元の皆様の深いご理解のもとに昭和51年4月に発足しました。保存会ではこの目的達成のため、(1)獅子舞棒術の保存・振興に関すること、(2)祭典・祈祷の実施に関すること、(3)後継者の養成に関すること、(4)その他目的達成に必要な事項の4項目を柱として事業を行っています。その中で後継者養成の一環として馬室小学校のささらクラブの指導をはじめ、各地の公演会などに積極的に参加し、演技の向上や団体の広報など活発な活動を行っています。本会がますます発展できますよう皆様方の一層のご愛顧をお願いいたします。

### 参考資料:

- 金子愛治1937「馬室村のササラ概要」『埼玉史談』第8巻第3号
- 倉林正次1957「獅子舞の系統―埼玉県―」『国学院雑誌』59巻1号
- 倉林正次1970「埼玉の獅子舞の系統」『埼玉の獅子舞』埼玉県教育委員会
- 倉林正次1970『埼玉県民俗芸能誌』
- 鴻巣市教育委員会1961『鴻巣の文化財』第1集
- 埼玉県立民俗文化センター1985  
『原馬室の獅子舞・棒術』埼玉県民俗芸能調査報告書第4集
- 埼玉県立民俗文化センター1992  
『埼玉県民俗芸能緊急調査報告書 埼玉県の民俗芸能』
- 埼玉県教育委員会1982  
『獅子舞の分布と伝承』埼玉県民俗芸能緊急調査報告書第4集
- 田中義一「原馬室の獅子舞 その見どころ」
- 原馬室獅子舞棒術保存会編『原馬室の獅子舞棒術パンフレット』



鴻巣の文化財 第4号

### 鴻巣に伝わる郷土芸能

～原馬室の獅子舞・棒術～  
平成16年2月5日

編集：鴻巣市教育委員会

発行：鴻巣市教育委員会・鴻巣市遺跡調査会

協力：原馬室獅子舞棒術保存会

